

AN ENGLISH
AND AMERICAN
LITERARY
CALENDAR
miscellaneous

英語歲時記／雜

KENKYUSHA

英語歲時記／雜

AN ENGLISH AND AMERICAN LITERARY CALENDAR miscellaneous

監 修

土居 光知

福原麟太郎

山本 健吉

編 集

成田 成寿

研 究 社



KENKYUSHA

< 検印省略 >

資料提供

アイルランド領事館
英国大使館広報課
英国旅行協会
キーストン
共同フォトサービス
黒沢敬一
東京計器 K.K.
東京動物園協会
難波利夫
日本コカコーラ K.K.
日本郵船
ノースウエスト航空

野津文雄

B. O. A. C.
米国商務省観光局
三井物産

図・さし絵

大川アート
佐藤広喜
山下史人

箱・表紙装幀

増淵聖司

英語歳時記／雑

1969 年 10 月 25 日 初版発行

1978 年 7 月 20 日 6 版発行

編 者 成 田 成 寿

発行者 近 藤 繁

発行所 研究社出版株式会社

〒162

東京都新宿区神楽坂1の2

電話 東京 (269) 4521(代)

振替口座 東京 7-83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

写真製版 学術写真製版所

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

落丁・乱丁はお取りかえします

1390-180005-1860

執筆者一覧

*安藤一郎	石井正之助	*内田道子
大沢実	大橋健三郎	*大原恭子
大山敏子	小川五郎	小川二郎
尾島庄太郎	*加藤憲市	加藤龍太郎
加納秀夫	*刈田元司	*木島平治郎
*黒沢敬一	近藤いね子	佐山栄太郎
島田謹二	清水砂や	*寿岳文章
朱牟田房子	芹沢栄	*高野フミ
高橋康也	筒井東衛	土居光知
外山滋比古	外山弥生	中西信太郎
*成田成寿	*難波利夫	野尻抱影
*野津文雄	羽矢謙一	*東浦義雄
福田陸太郎	*福原麟太郎	星谷剛一
村岡勇	村上至孝	八木毅
大和資雄	*横川信義	*吉武好孝

(* 印は本巻の執筆者)

は じ め に

この『英語歳時記』も、『春』『夏』『秋』『冬』と季を追って進み、本巻『雉』の部をもって一応完了となるのは、うれしいことである。この間、監修の諸先生、執筆諸家、また絶えずご声援をお与えくださった読者諸賢のご好意があった。また研究社と編集の方々の献身的な努力があった。ここに改めて深謝する。

この計画はどこにも類例のないところから出発した。初めのころはいったいどうなることか不安ですらあった。際限のないような、どこまでやればよいのか、どこまでやれるものかもわからなかった。そういう五里霧中の思いの中から諸方面のご援助をいただいて、ようやく、ここまでたどりつくことができた。各項目の執筆には資料の蒐集だけでもたいへんな努力が必要であったはずである。編集子自身いろいろな穴埋めの仕事をして経験したことであるが、各項目について、すぐに資料の見つかるものと、どうしても見つからないものもあった。日本ではふつうなことが、向うでは、そうでないということも多かった。編集子自身は、さいわいに詩集の類は比較的たくさん持っていた。ことに現代のイギリス、アメリカの詩集については比較的だれよりももっていたのではなかったかと思う。編集子が現代詩に関心があり、「現代詩研究」という小詩誌の同人で、ふだん、そのためによく仕事をしていたことが思いもかけずに役に立った。また一時通っていたハーヴァード大学の詩研究室におよびもつかないが、自分でもそういうものに近いものができないかと多少考えていたから、詩集、詞華集類をわりに持っていた。ただ、これは執筆諸家のどなたの場合にも、そうではなかったかと思うが、折からの大学紛争で困った。これは骨身にこたえた。教授会などの会合が多くなって時間的余裕の見つけにくいことも困った。さらに、研究室が学生によって封鎖されて英文科の研究室や自分自身の研究室の本を利用することができなくなった。自分の研究室に置いた本も利用できず、いろいろな本やコンコーダンスの類が、私の場合には、ほとんど、使用できなかったことはたいそう不便であった。だから編集子の関係の項目については自分の家の蔵書しか用いることしかできなかった。コンコーダンスもあまり使えないうえに、できれば自分で探したいという気持ちもあった。ある項目については自分の読んだことのある本を記憶によって探さなければならなかった。また、手当たりしだいに詩集を丹念にめくって行って探すこともあった。平素から索引でも作っておけば便利であったろう。また詩についての索引もあるのであるが、そのわりに役に立たなかった。これは執筆諸家のどなたにも共通の印象であったろうと思う。これからは読んでいて気のつくたびに注意して、増補訂正などをしていきたいと思っている。

本巻については全巻の補遺的というよりも、季節にあまり直接の関係のない、しかし

イギリス、アメリカの生活に密着したもののうちから選ぶようにした。補遺的なものについては改めて将来考えることにする。なお本書の内容についてはつぎのような方針を採った。

1. 項目は「自然」地誌、動物、植物、「社会」住居、服飾、食物、交通、教育・職業、結婚・葬式・宗教ほか、スポーツ・娯楽、神話・古俗・俗信・妖精の11部に分けた。
1. 本巻に収録した項目の総数459、地誌22、動物103、植物76、住居10、服飾22、食物66、交通23、教育・職業11、結婚・葬式・宗教ほか7、スポーツ・娯楽61、神話・古俗・俗信・妖精58。
1. 項目のつづりはできるだけ英米の現行の辞書に従い、発音やアクセントについても、日本で慣れている音標文字にしたがったが、その根拠として英米の辞書、発音辞典などを参照した。
1. 邦訳名についてはできるだけ日本で受け入れられているもので表記した。
1. 動物、植物の項目での邦訳名は原語読みの場合を除き、ひらがなで表わし、解説、引用文邦訳ではすべてカタカナにした。
1. 引用はすべて原文とし、かならず訳文を添えた。
1. 引用原文の出典について、単行本および雑誌の場合はイタリック体に、作品集中の1篇もしくはその1部を表題とする場合は引用符でくくった。
1. 各項目の解説の末尾にある〔 〕の姓は、それぞれ執筆者名を表わす。
1. なお、同一詩句などが、各執筆者によって、くりかえし引用されている場合がある。また、その原文の典拠によって多少つづりの差があることもあるし、訳文に差のあることもあるが、諸家のご意見を尊重した。

編集子関係の項目は例のごとく執筆をお願いした方々のご都合でまわってきたものなどで、これについては辻正次郎、中川 誠、棚橋克弥、木村治美、渡辺典子などの諸氏にご苦勞をお願いしたものが多い。ここに記して感謝する。

1969 年 9 月

編 者

目 次

はじめに	iii
自 然	
地 誌	3
動 物	37
植 物	131
社 会	
住 居	185
服 飾	197
食 物	221
交 通	285
教育・職業	317
結婚・葬式・宗教ほか	331
スポーツ・娯楽	351
神話・古俗・俗信・妖精	401
索 引	439
項目索引(英語名)	440
項目索引(和 名)	447
作者・作品索引	454
執筆者一覧	扉裏

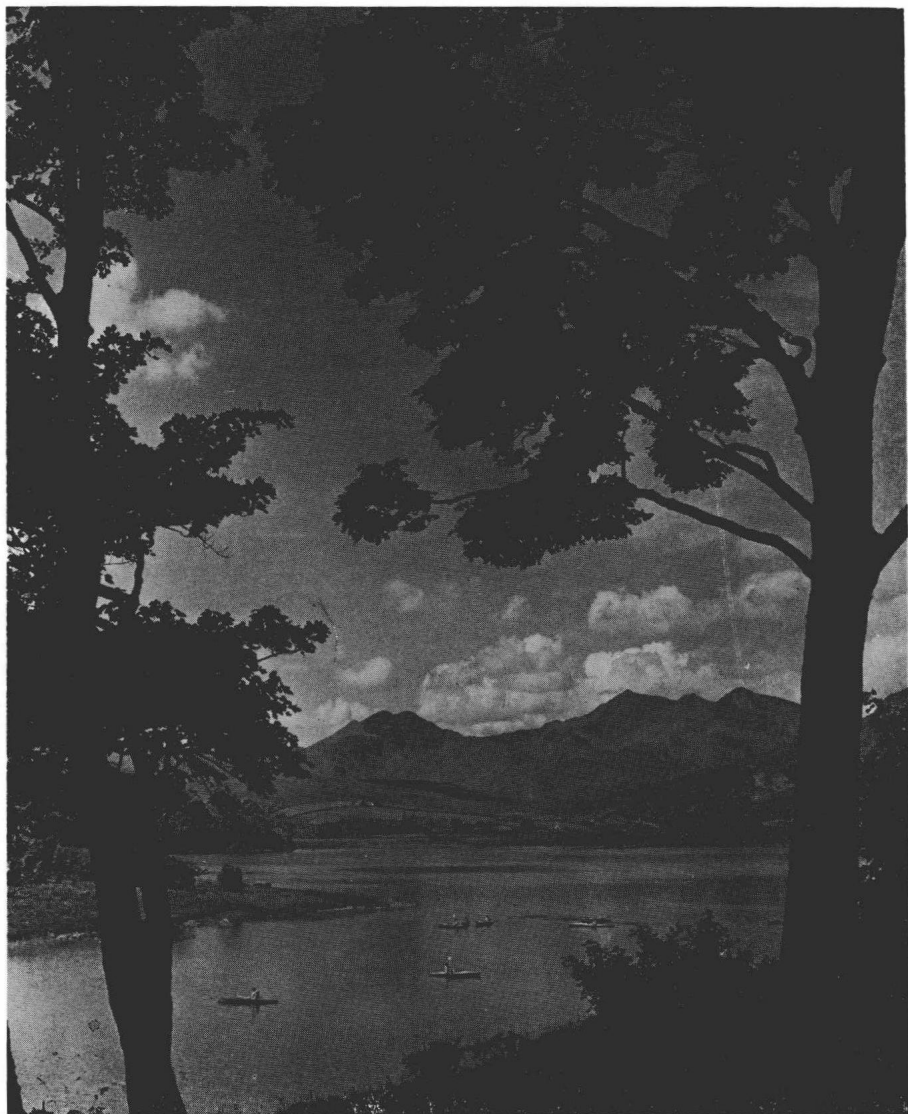
彩 色 図 版

自 然	1
犬	対 60
樹木	対 156
社 会	183
神話	対 414
妖精	対 430



自然

地 誌

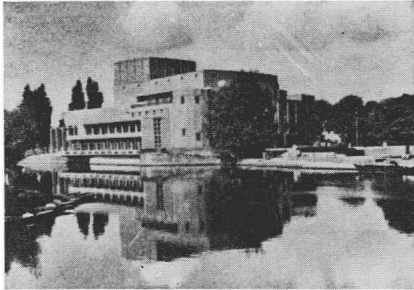


Avon
Boston
Cam
Cambridge
Catskill Mountains
Chicago
Dixie
Dublin
Edinburgh
Grand Canyon
Harvard
Liffey
London
Mississippi
New York
Niagara
Oxford
Rockies
Salem
San Francisco
Snowdon
Thames

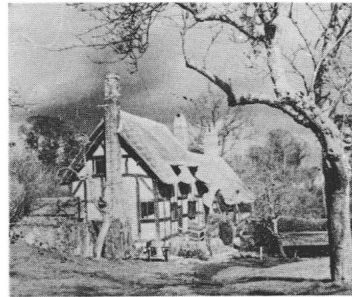


Avon [éivən] エイヴォン

Shakespeare を “Sweet Swan of Avon!” つまり「エイヴォン川の美しきハクチョウ」と呼んだのは Ben Jonson で、その句は Shakespeare の First Folio の巻頭に寄せた詩篇のうち (l. 71) に出ている。そしてそれは今日では Shakespeare の別名で、*POD* の swan の項にも (fig.) poet (esp. *S~of Avon*, Shakespeare) と出ている。Shakespeare が生まれたところが Stratford-upon-Avon であったからである。upon また on-Avon というのはその生地 Stratford が Avon 川の畔(べ)りにあるという意味で同様の upon または on を



用いての造語法はほかにいくつも例がある。と同時に Avon という川の名もきわめて普通で元来は「水」の意味である。現に Avon と呼ばれている川が England に 3 つある。Salisbury のあたりを流れて English Channel に入る Avon または East Avon; Bristol の近くを流れて Bristol Channel に入る Avon, または Lower Avon または Bristol Avon; それから England の中部 Northampton に発して Warwickshire に入り、Shakespeare の故郷 Stratford を洗い、うねくねとして南流し、Severn の大河に合流して Bristol Channel に入る Avon または Upper Avon である。われわれにとってもっとも親しいのはこの最後のもので、Shakespeare の生地では Clopton Bridge という古風な名の 14 の arch を連ねてつくった眼鏡橋をくぐるとそのあたりにハクチョウが浮かんで遊び、Shakespeare の菩提寺 Holy Trinity Church が影を映している。Washington Irving の *Sketch-Book* のなかの 1 章 ‘Stratford-upon-Avon’ の巻頭には、Garrick の詩の 4 行が飾ってある。



Thou soft-flowing Avon, by thy silver	汝やさしき川波のエイヴォンよ、汝の銀波に
stream	よって
Of things more than mortal sweet Shake-	シェイクスピアは人間にあらぬものどもを

speare would dream;
The Fairies by moonlight dance round
his green bed,
For hallowed the turf is which pillowed
his head.

いみじくも夢みた。
その緑の床のまはりには妖精たちが月光に踊
った。
彼の頭を休めた芝生は神秘に聖められていた
からだ。 [福原]

Boston [bóstn] ボストン

アメリカ北部ニューイングランドの首都で海港。ニューイングランド地方で、もっとも
古く、もっとも重要な都会。その周辺にアメリカ開拓初期から独立戦争に関係するいろ
いろな遺跡がある。その付近には Mayflower 乗員たちの上陸した Plymouth や Emer-
son, Thoreau, Hawthorne などのゆかりの Concord, Salem, あるいは Emily Dickin-



son の住んだ Amherst
など、文学的関係の深い
ところが多い。またアメ
リカ最古の大学 Harvard
のある Cambridge も隣
接している。アメリカ独
立のきっかけのひとつと
なっている 'Boston Tea
Party' の起こったのは
1773年12月16日、Bun-
ker Hill の戦は 1775 年の
6月17日であり、George
Washington が軍隊を集
めた広場 Boston Com-
mon などがある。文学
的背景としても、Boston
はアメリカ文学のなかに
よくあらわれる。そして
Henry James や Lowell
の一族などは、その周辺

の文学的名門として現在までつづいている。James には *Bostonians* を初めこの地方に
関係のある作品が多い。また Longfellow の家も墓も Cambridge にある。

The readers of the *Boston Evening Transcript* ボストンイーヴニング・トランスクリプトの
読者
Sway in the wind like a field of ripe corn. 風のなかに揺れる熟したコムギの畑のように
—T. S. Eliot: 'The Boston Evening Transcript'

この新聞の名は *Boston Daily Evening Transcript* (1830-1941) で、Boston 周辺のニューイングランドの教養を代表する夕刊紙、それを T. S. Eliot が初期の詩で諷刺しているのである。

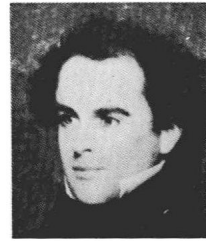
And this is good old Boston,	そしてこれは良い古きボストン、
The home of the bean and the cod,	マメとタラの故郷、
Where the Lowells talk to the Cabots,	ローウェル家はキャボット家に話をし
And the Cabots talk only to God.	キャボット家の話すのは神さまだけ

—J. C. Bossidy: 'On the Aristocracy of Harvard'

A solid man of Boston,	がっしり屋のボストン人
A comfortable man, with dividends,	安楽な男、配当金に
And the first salmon, and the first green	サケのはしり、グリーン・ピースの初物、

peas. —H. W. Longfellow: 'New England Tradegies, John Endicott', IV. i

It is no bad thing to pass from . . . the blousy beauty of Manhattan to . . . the more frugal, nipped loveliness of Boston. Of course, the New-Yorker might well feel terror on his arrival in Boston, especially if it is after night-fall, in that strange Back Bay station where the electric lamps seem to produce light without shedding it. He might reasonably fear that now justice is at last to be meted out to him. But when the first moment's panic is over he cannot but feel, as does doubtless the repatriate Bostonian, that the contrast is, for the time being at least, agreeable between what he had left and the cooler, grayer, more distinguished civilization to which he has come. More distinguished, in the accurate sense of that word, Boston is. While the national metropolis is at once vehement and vague, the New England capital is more measured, more clean-cut, more distinguished in the sense of having somehow so concentrated and clarified its special flavor that no one can for a moment doubt that—Boston's Boston.



HAWTHORNE

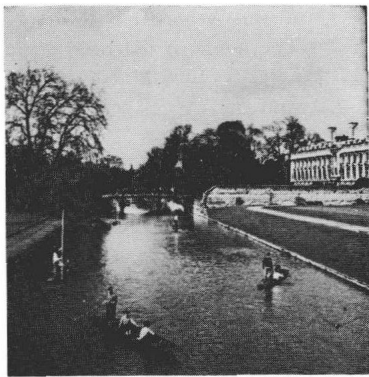
—H. Rhoads: *Harper's Magazine*, 'Why Is a Bostonian?' January, 1916

悪いともいえないのだが、マンハッタンのだらしのない美から、もっとつつましく、きついボストンの美しさへ変わっていくのは、むしろニューヨーク人はボストン到着の際は恐れを感じずることもありえよう。とくに日没以後だったら。あのふしぎな住宅地の駅で、電燈は光を出しているが照らしているわけでもない。とうとう年貢のおさめどきがきたかと思うのも無理がない。しかし最初の瞬間の恐怖が終わると、きつとボストンへもどってきた人の感ずるように、その対照は、少なくともしばらくは、自分が後にしたもの、今やってきた場所の冷たく、灰色で、異色のある文明との間で一致するものがある。言葉の正確な意味で、たしかにボストンは異色である。国の首都が激しくもあり、あいまいでもあるのに引きかえ、このニューイングランドの首都は、きちんとしており、はっきりしており、異色の点としては、どういふものかその特別な雰囲気集中して 明らかなものがあるという意味で、ボストンはボストンなのである。

[成田]

Cam [kæm] カム川

川の名。Camus [kéiməs] とラテン語風にも書く。England の中東部 Cambridgeshire を流れる。上流は Granta と呼ばれるので、ときに Granta ということもある。Cambridge 大学のなかを流れ、特に King's College や Clare College, Trinity Hall のあたりでは美しい芝生や散歩道が続き “The Backs” といわれる静かな環境をつくっている。川はそれからしばらく北流して、Ely の近くで The Ouse と合流し、さらに北上して The Wash に入り北海に注ぐ。Cambridge に住み学んだ人人にはなつかしい名であるから Milton も *Lycidas* のなかで、神々しく老いた川の精として Camus を出現させている。Cambridge 大学の象徴である。



Next Camus, reverend sire, went foot-
ing slow,
His mantle hairy, and his bonnet sedge.

つきにはゆるやかに歩む銀白の老翁ケイマス
来る、外套に野の草を飾り、
頭には菅の笠をいただく。

Thomas Gray の ‘Ode for Music’ という作は、1768 年 11 月 Grafton 公爵が Cambridge 大学総長に就任されたとき、かねての恩顧に報いて作ったものであったから詩中に Camus の名が見られる。

“Ye brown o’er-arching Groves,
That Contemplation loves,
Where willowy *Camus* lingers with
delight
Oft at the blush of dawn
I trod your level lawn,
Oft woo’d the gleam of *Cynthia* silver-
bright
In cloisters dim, far from the haunts of
Folly,
With Freedom by my Side, and soft-
ey’d Melancholy.”

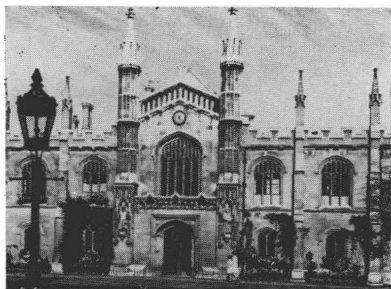
緑色濃く円屋根をしている森よ
汝こそは瞑想の愛するところだ、そこでは
ヤナギの茂るケイマスが、喜びに流れたためら
う。
あけぼのが色めくころ、
いく度も私はその平らな芝を踏み、
いく度も、銀に輝くシンシア(月)の光を求め
て、
ほの暗い廻廊に、愚かな仲間の集いをはな
れ、
自由を傍に、やさしい眼をした憂鬱を友とし
た。
[福原]

Cambridge [kéimbridʒ] ケンブリッジ

England 中東部、ロンドン北東 56 mile ほどのところにあり、Cam 川に臨む。Oxford にやや遅れて 13 世紀に大学ができたが、中世以来イギリスばかりでなく世界の学問の中心であり、多くのすぐれた文学者や一般に人物が出ている。Cambridge はとくにその

Backs と称せられる colleges の裏の Cam 川とその兩岸の緑の芝生と木立が美しいといわれている。現在でも Oxford よりはるかに静かである。

またこの Cambridge にほど近い Stour-bridge での大市は Bunyan の *The Pilgrims Progress* の Vanity Fair を思い浮かせたといわれている。



I ran out in the morning, when the air was clean and new	朝走り出ると空気は澄んで新しく
And all the grass was glittering and grey with autumn dew,	草はみんな秋の露に光り灰色、
I ran out to an apple-tree and pulled an apple down,	私はリンゴの木へ走っていきリンゴをい だ、
And all the bells were ringing in the old grey town.	そして鐘がみんな鳴っていた古い灰色の町 で。
Down in the town of the bridges and the grass,	あっちの橋と芝生の町では、
They are sweeping up the leaves to let the people pass,	落ち葉をはいて人の通れるようにしていた、
Sweeping up the old leaves, golden-reds and browns,	はく古い葉は金紅色と茶色、
Whilst the men go to lecture with the wind in their gowns.	男たちは講義に出ていく、ガウンに風を受け て。

—F. Cornford: 'Autumn Morning at Cambridge, October 1902'

なお、Rupert Brooke の有名な 'The Old Vicarage, Grantchester' という詩は、Cambridge の郊外のことをうたったもので第1次世界大戦後では人気のあったものである。 [成田]

Catskill Mountains [kætskil máuntinz] キャットキル山脈

The Catskills, The Kaatskill Mountains などともいう。New York 州南西、Hudson 川の兩岸、Appalachian 山脈の一群をなし、山麓に Catskill という村があり木立がうっそうとしていて、夏の避暑地となる。最高峰は Slide Mountain (1,282 m) であるが、New York から比較的近いが深山の趣きがあり、とくに19世紀初め Thomas Cole (1801-1848) などが、この山を主題にした絵を描き、一般的にも 'Hudson River School' というアメリカ初期のロマン派画風を初めるにいたったところである。Washington Irving の 'Rip Van Winkle' の背景となるところでもある。

Whoever has made a voyage up the Hudson, must remember the Kaatskill mountains. They are a dismembered branch of the great Appalachian family,